

# 旧聞日本橋

蕎麦屋の利久

長谷川時雨

青空文庫



角の荒物屋が佐野吾八さんの代にならないずっと前——私たちまだ宇宙にブヨブヨ魂が漂<sup>ただよ</sup>っていた時代——そこは八人芸の〇〇齋という名人がいたのだそう、上げ板<sup>いた</sup>を叩<sup>たた</sup>いて「番頭さん熱いよ」とうめ湯をたのんだり、小唄<sup>こ唄</sup>をうたったりすると、どうしても洗湯<sup>おゆや</sup>の隣りに住んでる気がしたり、赤児<sup>こども</sup>が生れる泣声に驚かされたりしたと祖母がはなしてくれた。

この祖母が、八十八の春、死ぬ三日ばかり前まで、日髪<sup>ひがみ</sup>日風呂<sup>ひぶろ</sup>だった。そういうと大変おしやれに聞えるが、年寄のいるあわれつぽさや汚<sup>きた</sup>ならしさがすこしもなく、おかげで家のなかはずがやかだった、瘦<sup>や</sup>せてはいたが色白な、背の高い女で、黒じゆすの細い帯を前帯に結んでいた、小さいおちよこで二ツお酒をのんで、田所町の和田平か、小伝馬町<sup>こでんま</sup>三丁目の大和田の鰻<sup>うなぎ</sup>の中串を二ツ食べるのがお定<sup>きま</sup>りだった。

祖母のお化粧部屋は蔵<sup>くら</sup>の二階だった。階下<sup>した</sup>は美しい座敷になっていたが、二階は庭の方の窓によせて畳一畳の明りどりの格子<sup>こうし</sup>がとつてあり、大長持<sup>おおながもち</sup>やたんすその他の小引出しのあるもので天井まで一ぱいだった。中央の畳に緋毛氈<sup>ひもうせん</sup>を敷き、古風な金<sup>かね</sup>の丸鏡の鏡台が据<sup>すえ</sup>てあった。

三階の棟柱には、彼女の夫の若かつた時の手跡で、安政三年長谷川卯兵衛建之——と美事な墨色を残している。その下で八十の彼女は、日ごとに、六ツ折りの裾に絵をかいた障子屏風を廻らし黒ぬりの耳盥を前におき、残っている歯をお歯黒で染めた。銭亀ほどのわりがらこに結つて、小楊子の小々太い位なのではあるが、それこそ水の垂れそうな鼈甲の中差と、みみかきのついた後差しをさした。鏡台の引出しには「菊童」という、さらりとした薄い粉白粉と、しようえんじがお皿に入れてあつた。鶏卵の白味を半紙へしいたのを乾かして、火をつけて燃して、その油燻をとるのに、元結でつるしたお小皿をフラフラさせてもたせられていたことがあつた。ある時、お皿の半分だけしか真黒にならなかつたが、アンポンタンらしい理屈を考えた。どうせ、毎日おばあさんが拭いてゆくのだからと——今思えば、それが眉墨であつたのだが——

祖母は身だしなみが悪い女を叱つた。

「おしやれではないたしなみだ、おれは美女だと己惚れるならおやめ。」

文化生れのこの人は、江戸で生れはしなかつたが、江戸の爛熟期の、文化文政の面影を止めていた。万事がのびやかで、筒つぼのじゅばんなど、どんなに寒くても着なかつた。ある年九月廿日、芝の神明様のだらだら祭りに行くので、松蔵の俵に、あたしは祖母

の横に乗せられていた。紺ちりめんへ雨雲を浅黄と淡鼠で出して、稲妻を白く抜いた単に、白茶の唐織を甲斐の口にキュツと締めて、単衣には水色太白の糸で袖口の下をブツツかがり、その末が房になつてさがつているのを着ていた。日陰町のせまい古着屋町を眺めながら、ある家の山のように真黒な、急な勾配をもつた大屋根が、いつも其処へ来ると威圧するように目にくるのを避けられないように、まじまじ見詰めながら通つた。

祖母は伊勢朝長の大家の生れで、幼少な時、童のする役を神宮に奉仕したことがあるとかで神明様へは月参りをした。よくこの人の言つたのに、五十鈴河は末流の方でもはいつてはいけない、ことに女人はだが——夏の夜、そつと流れに身をひたすと、山の陰が抱いてるように暗いのに、月光は何処からか洩つてきて浴る水がキラリとする。瀬が動くと、クスクスと笑うものがあるので、誰と低くきくと、あたしだよと答えるのは姉さんで、そつと這うようにして上陸——

その折こうも言つた。香魚は大きい、とつてきてすぐ焼くと、骨がツと放れて、その香のよいこと——

あたしは先年、神路山が屏風のようにかこんだ五十鈴河のみたらしの淵で、人をおそれぬ香魚が鯉より大きく肥つているのを見た。昔は、そのおちこぼれが、伊勢の人に香よ

き自慢の香魚を与えたのであろう。

帰途は、めっかち生芽とちぎ箱がおみやげ、太々餅も包まれている。で、この祖母の道楽は、彼女の掴んでいた道徳は、一視同人ということで、たまたまの外出はその点で彼女を自由にさせくつろがせたものと見える。また、彼女の気性を知っている者たちは、逆らわずにそのままに彼女の厚意をうけいれた。

「御隠居さん、今日は松田ですか？」

俣の上と下で、帰りのお夜食の寄りどころが定まった。お夜食といっても五時になるやならずであるうが——そこで。京橋ぎわの（日本橋の方からゆけば京橋を渡って）左側、料理店松田へ寄った。中の広い階子段をあがって二階へ通った。

「松さんはよいものをおとり。」

顔馴染の女中さんは、ニコニコしてなるたけ涼しいところへ座らせようと、莫座の座ぶとんを持ってウロウロした。どの広い座敷も、みんな一ぱいなので、やっと、通り道ではあるが、縁側についたてで垣をつくってくれた。

八十に近い祖母と、六ツ位の女の子と、松さんとは親密に車座になった。祖母のお膳には大きな香魚の塩焼が躍っている。松さんは心おきなく何か一生懸命に話したり願った

り、食べたりしている。あたしが所在なくしていると、若い女中が来て、噴水の金魚をこらんといった。

松田はいろんなことで有名になっているが、噴水と金魚もたしかによびもののひとつであつたのであろう。あたしは余念なく眺めていたが、

「嬢じょうつちゃん、早くこちらへ来て——」

と顫ふるえた声で言つた女中さんに引っぱられて祖母のいる場処へかへつた。

と、どうしたことか、他の女中がお膳をはこんで裏二階の隅の方の室へやへ席をうつそうとしているところだつた。近くにいた支那人のひとかたまり一団いったんが、喧やかましくがやがや言つて席を代えさせまいとしたが、祖母はグングン傍そばを通つていった。

別の部屋へかわつてからも、隣席の人たちが妙にあたしを見て、首をひねつたり、何かいったり、うなずいたりした。帰りには、松田の人たちに守られて、俵のおいてある裏口の方から出された。

「大丈夫です。みんな表梯子ぼしじの方ばかり見張っていますから。」  
と送り出した人たちは言つた。松さんは大急ぎで俵をひいて駈出かけだした。

「おそろしやおそろしや、この子を支那人なんきんが浚さらおうとして——」

と、俵をおりると祖母は家の者に言った。

赤ん坊のころ、若い母親の不注意から、釣らんぷの下へ蚊帳かやを釣って寝させておいたら、どうした事か洋燈ランプがおちて蚊帳の天井が燃えあがった。てつきり赤ん坊は焼け死ぬものと誰もが思ったが、小さい布団ふとんのまま引摺りひきずり出されて眠っていたという子は、支那人の人浚しゆんいの難からも逃れたのだった。そのアンポンタンが、どうした事か音に好ききらいが激しくつて、蕎麦屋そばやのおばあさんを困らしたが――

丁度ここに、いつぞや『婦人公論』へ書いた短文をはさもう。

隣家の蕎麦屋で粉こなをふるう音が、コットンコットンと響いてくると、あたしは泣出したものです。住居蔵の裏が、せまい露地ろじひとつへだてて、そばやの飛離れた納屋なやがあったので、お昼過ぎると陰気なコットンコットンがはじまる。神経質な子供だったと見えて昼寝していても寝耳に聴附けて泣出したのです。両親や祖母が困ったと言っていたのは、後日あとできいた思出でしょうが、そのふるいの音も厭いやだったに違いありませんが、その家全体が子供心にきらいだったのではないかと思われまます。どうも暗い小さなそばやらしかったの

です。「利久」といって、主人になった息子とお媼おばあさんだけで、そのお媼さんが、骨だつた顔の、ボクンとくぼんだ眼玉がギョロリとしていて、肋あばら骨ほねの立った胸を出して、大お肌おはだぬぎで、真ま暗まなところに麵めん棒ぼうをもつてこねた粉をのばしていると、傍がまに大釜がまがあつて白い湯気が立昇たちつていたり、また粉をふるっている時は——宅の物置のつづきのさしかけで、角かどの小さな納屋の窓から、そのお媼さんの皺しわがれた肩には、汚きたない濡ぬれ手て拭ぬぐいが肩掛かたかけのように結びつけられてあつて、白髪しろがみまじりの毛がそそげ立たつて、斑まだらにはげた黒い歯はで笑わらわれると、とても泣かすにはいられなかつたのです。夏の、重おもくなるしい風のない蔵座敷くらざしきのなかに寝せつけられて、そのコットン、コットンをきくときくと泣出した覚えはあつても、それが火のつくような泣方で、手もつけられなかつたときくと、今ではその媼おばあさんに気の毒あはれな気がしますが、じきにその媼おばあはコレラで死んでしまつて、その店もなくなつてしまいました。

ある時、祖母の従兄いとこだというおじいさんが伊勢から訪ねてきたことがありました。おじいさんはもう九十歳だといいました。祖母は八十ばかりでした。この二人は人世五十年以上逢あわなかつた様子で、しきりに懐なつかしがっていました。わたしはそのおじいさんの赤あかとんぼ位のちよん鬚まげが、光あつた頭かぶにくつついていてのを、西洋人を見るより珍めづらしく見ていま

した。二階の広間で御馳走ごちそうをして、深川でもと芸者をしていたという二人の血びきのおたけさんという女を呼んで、人交ぜひとましないで御酒を飲んでいましたが、やがておじいさんが太鼓たいこをたたき、女のひとが三味線を弾いて、祖母が踊りはじめました。子供は行くのでなないといわれて、そつと梯子段はしごだんのところから覗のぞいてみると、しまいには二人の老人が浮れて、伊勢音頭おんどを踊っているかげが、庭にむかった、そとの暗い廊下の障子にチラチラと動いていました。その手ぶりのよさ——わたしは最近伊勢いせの古ふる市いちまでいって、備前屋で音頭を見せてもらいましたが、とてもとても、幼目おきなめにのこる二人の老人のあの面白さは、面影も見る事が出来なかつたのです。

こんな事を書いたらまだいくらかもあるでしょうが、町で生れた子には、自然からうけた印象のすけないことがものたりません。

利久の納屋はあたしの家の物置と一ツ棟むねで、二ツに仕切つて使つていた。丁度庭裏の井戸のところ窓があつて、井戸をはさんでの釜場かまばになつていた。

激しいコレラの流行はやつた最終だというが、利久はお媪ばあさんがコレラで死ぬとすぐに倒産つぶれた。万さんという息子は日雇人夫ひようとりになつたが、そののち、角の荒物屋へ酔つて来ていた。

焼酎しょうちゆう

をうんと飲んで死んだと、荒物屋佐野さんの十三人目の、色の黒い、あぶらぎつた背虫のように背を丸くしたおかみさんが宅うちへ知らせに来た。佐野さんは時々面白い話をした。おかみさんをとりにかえるたんびに、だんだん悪くなつて、こんな汚ない女にとうとうなつてしまったといつた。そういわれても怒らずに、おかみさんは、糊のりを煮ていた。お天氣のよい日、朝の間に、御不浄ごふじようの窓から覗くと、襟の後に手拭を畳んであててはいるが、別段たぼの油が着物の襟を汚すことはなさそうなほど、丸くした背中まで抜き衣紋えもんにして、背中の弘法こうぼうさまのお灸きゆうあとや、肩のあんま膏こうを見せて、たすきがけでお釜の中のしめ糊を掻かき廻まわしていた。※とした看板かんばんがかけてあつて、夏の午前あさは洗濯ものの糊つけでよく売れるので忙しがつていた。平日ふだんでも細かい板切れへ竹づつぽのガンクビをつけたのもつて、お店から小僧さんが沢山買いに来た。

コレは門かどなみ並なみといつてよいほど荒したので、葛湯くすゆだの蕎麦そばがきだの、すいとんだの、煮そうめんだの、熱いものばかり食べさせられた。病人の出た家の厠かわやは破こわして蕪こもをさげ、門口へはずつと縄を張つて巡查が立番をした。

深川芸妓ふかがわげいだつたおたけさんもコレラで死んだ。背の高い、反そり身な、色の白い、額の広い女で祖母の姪めいだけに何処どこかよく似ていた。辻車に乗つて来て、気分がわるいと言つた。

それなら早く帰る方がよいだろうと、その車で出たが、車屋がすぐ引返してきて、お客様が変わたとおろした。

門から這入って、庭を通って来て、渡り縁に腰をかけたが、今出ていった時とは、すっかり相恰が変わって、額を紫っぽく黄色く、眼はボクンと落ちくぼみ、力なく見開いている。なぜ引返したといっても辻車では仕方がなかった。住居は遠くもない鉄砲町なので、車夫は沢山のお礼をもらって病人を送っていった。

幾日かたった。おたけさんの開いていた氷屋の店は、ガランとして乾いていた。軍鶏屋をはじめたのがいけなくなつて氷店になつたのだった。道楽ものの兄が二人いたが、その一人と母親とが伝染て、二、三日のうちに三人もいなくなつてしまった。

この西川屋一家も以前は大門通りに広い間口を持っていた。蕎麦屋の利久の斜向いに——いま現今でも大きな煙草問屋があるが、その以前は、呉服用達しの西川屋がいたところである。その主人はあたしの祖母の兄で、早くから江戸に出ていた。先妻に縹織よしの娘を生ませたが、奥女中上りの後妻が継兎いじめをするので、早くから祖母の手にひきとられ、年下のあたしの父の許婚となつた。

後妻は由次郎、鉄五郎、おたけさんを生んだ。父親が歿なると、男振りのよい忪たちは

直に店をつぶしてしまった——尤もそれには御維新の瓦解というものがあつた故もあるうが——二人の悴はありつただけの遊びをして、由次郎はコレラでなくても長くは生きないようになつていた。

鉄さんが鉄公になつたところは散々で、もう仕たい三昧の果だつた。賭博場を軽げ歩き、芸妓屋の情夫さんになつたり、鳥料理の板前になつたり、俵宿の帳付けになつたり、頭の家に厄介になつたり、遊女を女房にしたりしているうちに、すっかり遊人風になり金が無くなると、蛆虫のように縁類を嫌がらせた。

この男、あたしの目に触れだしたのは、越前堀のお岩稲荷の近所に何にかに囲われていたところだつた。染物屋の張場のはずれに建つた小家で、茄子の花が紫に咲いていた。白つぼくつて四角い顔のお婆さんが、鉄の悪口をグシヨグシヨと祖母に語っていた。でも、その時分鉄さんは、父に用事を言いつけられると、ハイ、と分明り返事をして、小気味よく小用をたしていた——尤もむずかしい仕事ではない、家のなかの雑用だが——彼は見かけだけは稜々たる男ぶりだつた。ちよつと類のすくない立派な顔と体をもつていた。面長な顔に釣合つた高い鼻、大きなきれの長い眼、一口に苦味走つた男だつたが、心根は甘かつたものと見える。母親が、夜になると忍ぶようにして勝手口からたずねてくると、

祖母の膝ひざの前にうづくまつて恵みを願ねがっている。その女が帰かえつてしまふと祖母は溜息ためいきをついて、

「えらい女ひとをもらつてしまつて、あの女ひとのために西川屋もつぶれた。あの女の心がけがわるいからだが——」

だが、奥女中姿の襦袢かいどりで嫁に來た時はうつくしかつたと、不便がみづつて貢みついでいた。

ある日祖母は、例によつて私をつれて、山の手の坂のある道を行つた。富坂といふところだと松さんは言つた。露路へはいりながら、しどい場ところ処ところですといつて番地と表札をさがしたが、西川鉄五郎の家はどうしても知れないので空家あきやのような家で聞くと、細い細い声で返事をした。

「此処ここでございます、此処でございます。」

祖母は松さんに手をとられてはいつていつた。畳もなければ根太ねだも剥はいである。

「御隠居いんきよさん」

戸棚を細目にあけてそう言つたのは、二、三日前の晩、袴はんてん纏ひもを紐ひもでしばつて着てきて、台所で叱なぐられていた女だつた。

「座るところはなくともよいから出ておいで。」

祖母はそう言ったが、やがて、モゾモゾと半裸体の女が這い出してきた。

「やれやれ、まあ！」

呆れた祖母は、俵に乗せてきた包みを松さんに取りにやった。

「お前をそんなにして投げだしておいて、鉄の人非人は何処へいった。」  
 という、禪ふんとしひとつで戸棚から、

「面目も御座ございませぬ。」

と這出してきた。そして、祖母が救いに来たのだと知ると、一昨日の晩、女が死ぬような病気で、どつと寝ておりますといったのは、二人ともすっかり忘れてしまつて、裸でも元氣な調子でもかくやりきれないという事を、子供のあたしにも面白くきかせるほど巧みにしゃべりたてた。

「よし、よし。貴様はのたれ死しようと思手だが、女子おなごはそうはゆかぬ。」

祖母がいるうちに、米屋からは米がはこばれ、炭屋からは炭がきた。松さんが運んだ包みから出た着物を女は着た。

鉄さんは景氣よく根太のつくろいをして、戸棚の中に敷いていた花はなむしろ 莖むしろをおき、松さんは膝掛ひざかけを敷いて祖母とあたしのいるところをつくつた。

こんな処へ来ても、人ぎらいをしない祖母は、てんやから食物をとって、みんなで会食した。酒が廻ると鉄さんは、どんなふうにして大屋をこまらせてやったとか、畳は売ってしまつて、根太は薪のかわりに燃したと雄弁にまくしたてて叱られた。

家にかえつても何にも言わないので、祖母はあたしを可愛がった。妹は外でおとなしく、帰るとすぐ告げ口をするので、猫かぶりだといつて、いつもおいてきぼりにされていた。言いつけ口は嫌いだが、決してもの事を隠しだてするひとではなかったから、帰るとすぐその晩か、遅くもあくる夜は、松さんの俵が荷物ばかりを積んで、再びなまけ者の住居を訪れるのだった。

「無駄だけれど——」

と言いながら母は布団やその他のものを積ませた。

だが、鉄さん自身が浅間しい姿で、地虫のように台所口につくばった時、祖母は決してゆるさなかつた。同情の安売りはしなかつた。取次ぎが、ぜひ御隠居様にお目にかかりたいと申すすと伝えたとき、台所の敷居に手をつくようなことをせず、表から来いと言わせた。

彼女は卑屈を嫌つたが、決して貧乏を厭いはしない。ところが、哀れな鉄さんは、卑屈

をいやしまず貧乏を鼻白んだ。彼は何時までもウジウジ屈んでいた。祖母は堪らなくなつたと見えて台所口へゆくと柄酌に水をくんで鉄さんの頭からあびせかけた。

「とつととゆけ、用があらば伯母の家だ、表からはいれ。」

そう怒鳴つた。ブツブツ口小言をいつていた母が、かえつて気の毒がつて小銭を与えたりした。

鉄面皮な甥は、すこしばかり目が出ると、今戸の浜金の蓋物をぶるさげたりして、唐棧のすつきりしたみなりで、膝を細く、キリツと座つて、かまぼこにういをつけながら、御機嫌で一杯いただいていた。そんな日にはいやに青い髭だと思つた。

この男、晩年に中氣になつた。身状が直つてから、大きな俵宿の親方がわりになつて、帳場を預かつていたので、若いものからよくしてもらつていふといつた。それでも若い衆におぶさつて一度逢いたいからと這入つて来た時に、みぐるしくはなかつた。大きな男が、ろれつの廻らぬ口で何か言いながら、はいはいした顔を出した時、みんなびつくりした。

「お前なぞ、そんないい往生が出来るなんて——よく若い者が面倒見てくれるな。」  
父がそう言うのと、

「全く——裸で湯の帰りに吉原へ女郎買いにいったりした野郎が——全く、若いものがよくしてくれませう。」

と言った。逢いたいにも逢いたかつたが、世話になる部屋の若い者に礼をしてくれと頼むのだった。

さて、

イツチク、タイチク、タエモンドンの乙姫さまが、チンガラホに追われて——などと、大きな声で唄うたいつれていたアンポンタンも小学校へあがる時季が来た。そのころは勝手なもので、六歳でも許したものだ。尋常代用小学校といつても小さく書いてあるだけで、源泉学校だけの方が通りがよかつた。重おもに珠算しゆざんと習字と読本だけ、御新造ごしんぞさんも手伝えば、お媼おあさんもお手助けをしていた。

引出しが二つ並んでついた机を松さんが担いで、入門料に菓子折を添え、母に連れられて学校の格子戸をくぐつた。先生は色の黒い菊石面あばたつらで、お媼さんは四角い白つちやけた顔の、上品な人で、昔は御祐筆ごゆうひつなのだから手跡しゆせきがよいという評判だつた。御新造ごしんぞさんはまだ若くつて、可愛らしい顔の女だつた。

格子戸をはいると左に、別に障子を入れた半住居の座敷があつて、その上の二階は客座敷になつていた。先生は怖いから大變年をとつた人だと思つたが、多分三十位だつたかも知れない。お媪さんは先生のことを秋山が秋山がと言つた。

翌日からみんなと机をならべるのだつた。お昼すこし前になると、おみやげのお菓子を配つた。今朝登校のときに松さんがもつて来た大袋四ツが持出されて、うまい具合に分配されてゆくのだつた。世話やきの子供が幾人かで、全校の生徒の机の上に、落雁らくがんを一個二個ずつ配ると、こんどは巻せんべまきせんべを添えて廻る。その次は瓦煎餅かわらせんべという具合にして撒まききるので。

母の覚え書きがあるから記しておこう。

於保手おやすてならい 習初メ

金五十銭に砂糖折

外ほかに子供衆へ菓子五十銭分。

そのほか覚。

一月年玉分

五十銭

七月盆 礼

五十銭

試験	七十銭
月謝	三十銭
年暮	玉子折
年玉	五十銭

## 外に暑寒

なんと安価なものではないか。しかし、お豆腐は一丁五厘であつたのを、お豆腐やの前で読んだから知っている。お米のねだんは知らないから書くことが出来ない。

試験が割合にかかるのは、試験ということは学校へお赤飯を食べにゆくことだと思つたほどだから、お手数だつたと見える。近所の小学校の校長たちがむずかしい顔をして控えている前へいつて試験されるので、なるべく級の中から出来そうなのが前の方にならび、他校の校長の眼の前でやつた。前々日に下ざらいは出来ているのであるが、秋山先生の弟子煩悩は有名で、自分の方が終日ハラハラしていた。みんなその日はめかしていった。三枚重ねを着て、さしこみのついている籠甲の簪や、前がみぎしをさしている娘は、棲を折返してキチンと座っていた。男の子は長い袖の黒紋附の羽織、袴を穿いていた。

黒いぬり盆へお赤飯とおにしめが盛りつけられた。出来ない男の子は、食べてしまうとそつと釣にいつて、いつまでも帰つて来なかつたりした。校長さんたちの分は、大皿のお刺身などがとつてあつた。

洋算などは、大概なところで秋山先生が一人に答えをいわせ、

「出来たか。」

というときみんなが手をあげる。それで済みなのだつた。他の老人の校長などは居ねむりをしていた。

暮のお席書きの方が、試験よりよつぽど活気があつた。十二月にはいると西の内一枚を四つに折つたお手本が渡る。下の級は、寿とか、福とか、むずかしくなると、三字、五字、七字——南山寿とか、百尺竿頭更一步進とかいうのだつた。

課業はすっかりやめてしまつて、その手習にばかりかかる。そしてお墨すりだ。

——あたしのは丸八の柏墨だ。

——あたしのは高木のいろは墨だ。

——だめだ、いろは墨は、弘法様のでなくつちやいけない。

そんな事を各自に言つて墨を摺る。短かくなると竹の墨ばさみには喜んでグングンと摺

る。それを大きな鉢に溜めてゆくと、上級の子がまたそれを濃く摺り直す。

——こうやると好い香になる。と梅の花を入れる子もあつた。早く濃くなるようにと、墨をつけて柔らかくしておくものもあつた。

——ばりこになるよ。とそれを嫌がるものもある。

商家しょうかの町なので年の暮はなんとなく景気がよい。学校へも、お砂糖の折だの、みかんの箱だの炭俵だの、供餅おそなえだのが沢山もちこまれる。お席書がすめばその日から休みで、かえりには蜜柑みかんがもらえる。

二枚書いて、一枚は学校にずらりと張りつけ、一枚は家へもって帰る。親たちは、居間や、客間や、または、あたしの家などは玄関へ自慢で張る。

この秋山先生も書もらしてはならない人だ、学校そのものもまた！そして年の暮のこどもも——

柏墨の「丸八」はおおでんま大伝馬町三丁目の老舗しにせで、立派な土蔵造どぞうつくりの店だつた。紀文に張りあつた奈良奈の家うちだのなんのときいていた。「大晦日草紙おおみそかぞうし」とかいったように覚えていたが、くさ双紙ぞうしに、若い旦那だんなの色里いろざと通いを、悪玉がおだてている絵があつて、お嫁さ

んが泣いているのを見たとき、丸八の先代のことだとかいった。後に、春の絵の本を見た  
ら、香字という大<sup>だい</sup>尽<sup>じん</sup>に張りあう高総という大尽のことがあった。それも多分「丸八」の  
はなしだとかきいていた。その事實は知らないがとにかく、そんなにまで豪<sup>ごう</sup>奢<sup>しゃ</sup>な、派手  
なことがあつたうちと見える。



# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年2月

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年4月2日作成

2012年5月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 旧聞日本橋

蕎麦屋の利久

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 長谷川時雨

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>